

遊漁者ニーズ対応型 アユ種苗の総合的な放流指針の策定

(予算区分 県単 研究期間 平成 25~28 年度)

担当 : 水産技術研究所 富士養鱒場 木南竜平

【研究の背景とねらい】

- ・アユ釣りは中山間地域の経済活性化の一翼を担っていますが、近年ではアユ遡上の遅れや資源量の不安定さ等が問題となり、遊漁人口が減少しています。
- ・漁業権が設定されている河川では「人工系種苗」及び「海産蓄養種苗」が放流されていますが、後者の放流効果（≒遊漁者に対する価値）は明らかになっていませんでした。
- ・そこで本研究では、海産蓄養種苗の放流効果を明らかにした上で、人工系種苗を含めたアユ種苗の総合的な放流指針を策定することを目的としました。

【研究成果】

- ・食品添加物として認められているコチニール色素液（10g/L）に小型（1~2g）のアユを10分間漬けることで鱗や鱗などの外部組織を標識し、放流される海産蓄養種苗を人工系種苗や天然遡上魚と区別する方法を開発しました。
- ・モデル河川において4月に放流した海産蓄養種苗は、5月から10月まで長期的に混獲されていた（図1）ことから、人工系種苗の再捕が解禁当初に集中することと対照的に、海産蓄養種苗が長期的に釣られること、及び再生産へ寄与することが示唆されました。
- ・天然遡上魚、人工系種苗及び海産蓄養種苗の縄張性（≒釣られやすさ）は、人工系種苗で最も高く、このことが放流後の早期回収につながっていると推測されました。
- ・県下5河川を対象とした「アユ遊漁者の顧客満足度調査」の結果、河川毎に主要な顧客層が異なり見極めが重要なこと、友釣り客は漁期後半に満足度が向上すること、総合満足度は釣果に加えて混み具合・おもてなし・情報発信の多寡に影響を受ける（図2）ことを明らかにしました。
- ・以上を総合し、①遊漁者の満足度やニーズの把握、②明確な活動目標の設定、③種苗の使い分けによる適切な放流④満足度の向上につながる放流以外の取組、⑤協力者の確保・取組の継続、からなる放流指針を策定しました。

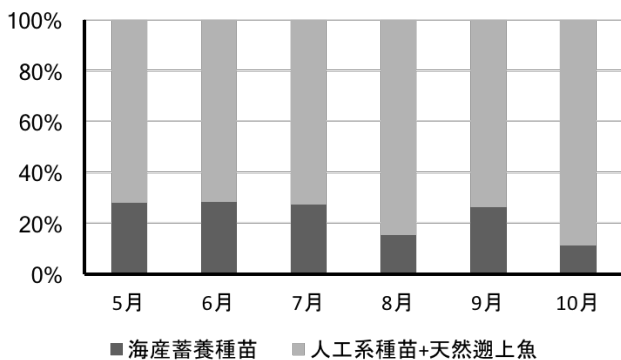


図1 海産蓄養種苗の混獲率の推移

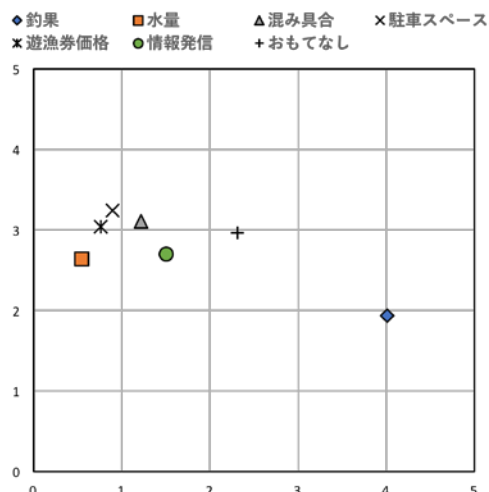


図2 各項目の平均満足度と総合満足度への影響度

【研究成果の普及方法】

- ・取りまとめたアユ種苗の総合的な放流指針は、各種研修会や巡回指導、個別相談を通して、河川ごとに最適な放流方法の指導を行います。

(作成 平成 29 年 3 月)